

⑤ **ダイヤモンドエレクトリック
ホールディングス**

**モノづくりで
脱炭素を推進**

①2020年 ②2050年 ③—

車

載用基幹部品や太陽光発電用PCS（パワーコンディ

ショナ）のほか、蓄電設備まで製造するダイヤモンドエレクトリックホールディングスは、20年12月にRE100へ参加した。鳥取県や栃木県の工場に設置した計約300kWの自家消費太陽光発電設備による再エネ利用をはじめ、21年12月

からは大阪本社エリアの複数拠点で使用する電力を再エネ100%電力へ切替えている。同社の事業用電力に占める再エネ比率はまだ僅かではあるが、50年のRE100達成に向け、省エネ化を進めつつ、自家消費太陽光発電設備の追加設置などを検討している。

そんな同社は、実はRE100に参加する以前から、環境配慮に力を入れてきた。というのも、自動車のエンジン部品である点火コイルや空調設備用部品を主力製品として販売してきたため、見方を変えれば二酸化炭素の排出を助長しているとも捉えられかねないからだ。

小野有理社長は、「社会から求められる企業となるには、公益性が伴う事業を手掛けなければならぬ。現代の社会要請の1つが環境配慮であり、我々は5年以上前から二酸化炭素排出ゼロを目指したモノづくりに取り組んでき

た」と述べる。

同社が太陽光発電用PCSや蓄電設備の製造に力を入れているのも、「我々の製品が使用されることで、二酸化炭素の排出削減に繋がる」（小野社長）と捉えているためである。同社は、事業活動を通じて年間約3万tの二酸化炭素を排出しているが、同社の太陽光発電用PCSが使用されることで、20年度実績では年間約17万tの二酸化炭素の削減に寄与したと試算している。

とはいえ、約3万tの二酸化炭素を排出しているのは事実だ。ならば、再エネ電力を活用して事業活動における二酸化炭素の排出をゼロにしていこうというわけで、同社にとってRE1

00への参加はいわば必然だったと言えるのかもしれない。

小野社長は「RE100に参加したことで、我々の活動や環境配慮への思いをより多くの方々に知ってもらうきっかけになった」としたうえで、「仕入先企業にも当社の考えを共有してもらい、そして共感してもらうことで、さらに深い取引をしていくことができると語った。

同社は、中長期経営計画で「車と家をものづくりでつなぐ」をビジョンに掲げているが、このほど、まさにそれを具現化する新製品を、東京電力ホールディングスと共同で開発した。すなわち、太陽光発電設備と蓄電設備、さらにはV2H（車から住宅への電力供給）設備を1台で制御できるPCSを含めた多機能型蓄電設備である。この製品があれば、太陽光電力で電気自動車を走らせ、住宅内の電力を賄うこともできるようになる。二酸化炭素排出削減に寄与する製品として、同社は22年度中にも発売する計画である。



小野有理社長